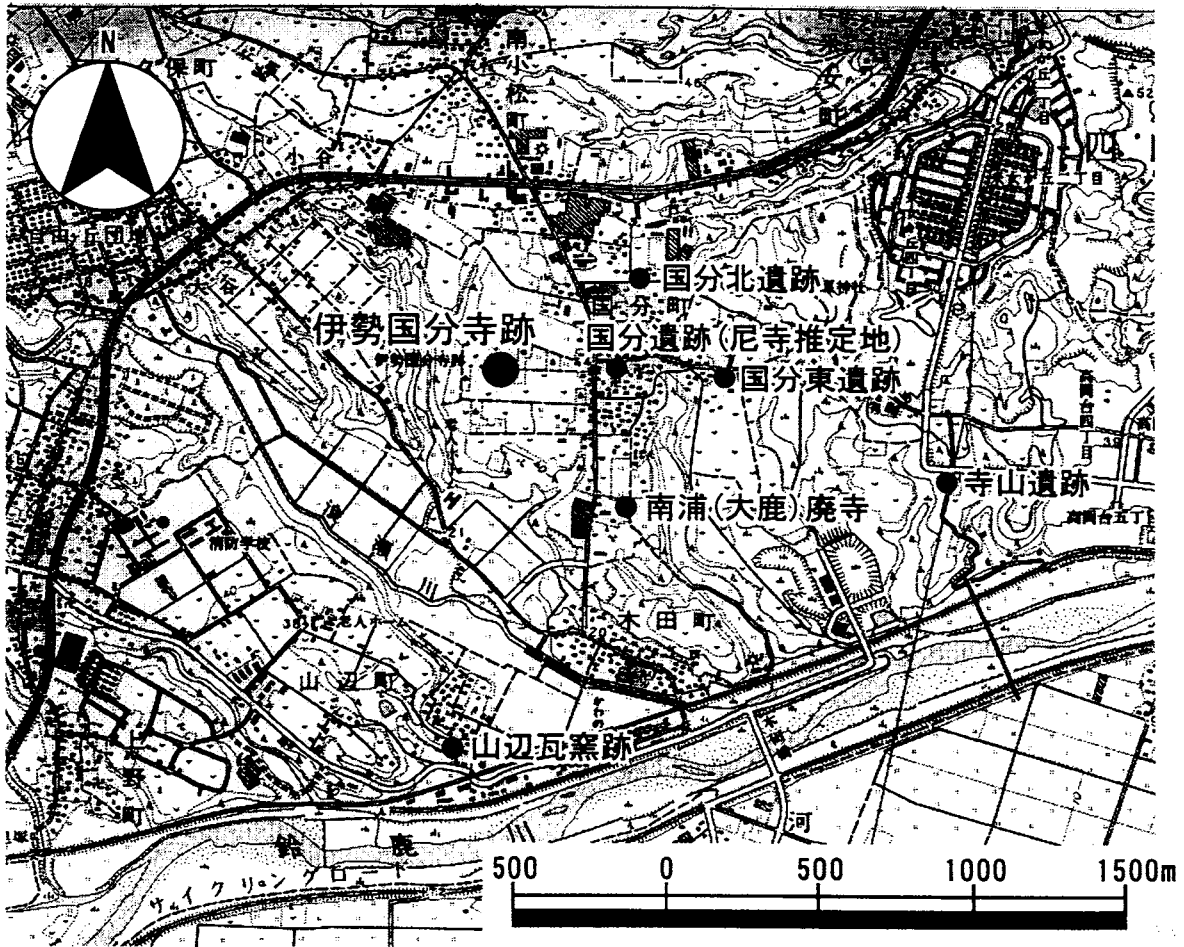


# 伊勢国分寺跡

## 第30次発掘調査現地説明会資料

2005年3月5日 14時から



遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

## 1. はじめに

国分寺とは奈良時代、<sup>しやうむ</sup>聖武天皇の<sup>みことりの</sup>詔(741年)により各国に置かれた寺院です。その背景には、仏典の教義にもとづき国家を平安に治めるとい<sup>ちんごこつか</sup>う鎮護国家の理念がありました。国分寺は<sup>そうじ</sup>僧寺「<sup>こんこうみやうしてんのうごこくのてら</sup>金光明四天王護国之寺」と尼寺「<sup>にじほっけめつざいのてら</sup>法華滅罪之寺」からなります。鈴鹿市国分町に所在する伊勢国分寺跡は、大正11年10月12日に国の史跡に指定されました。この史跡は僧寺の遺跡と考えられています。尼寺の遺跡は、現在の国分町の集落一帯の国分遺跡がそうではないかと考えられています。

昭和63年度から平成2年度までに行われた<sup>ついでい</sup>範囲確認調査により、180m四方の<sup>ついでい</sup>築地塀に囲まれた寺域(<sup>がらんち</sup>伽藍地)が確認されました。その成果をもとに市では史跡の全域およびその周囲の公有地化を平成7年から平成9年にかけて完了しました。

平成11年度から、史跡公園整備に先立つ<sup>がらんち</sup>伽藍(主要な建物などの堂塔)確認の調査に着手しました。同年度の調査では、まず<sup>こうどう</sup>講堂の<sup>きだん</sup>基壇(建物の台となる土壇)が確認されました。

平成12年度には<sup>こんどう</sup>講堂と<sup>きだん</sup>金堂の調査を行い、<sup>こんどう</sup>講堂基壇の規模が東西32.7m×南北20.6mであること、<sup>きだん</sup>金堂基壇の創建期の規模が東西30.5m×南北21.9mであることを確認しました。

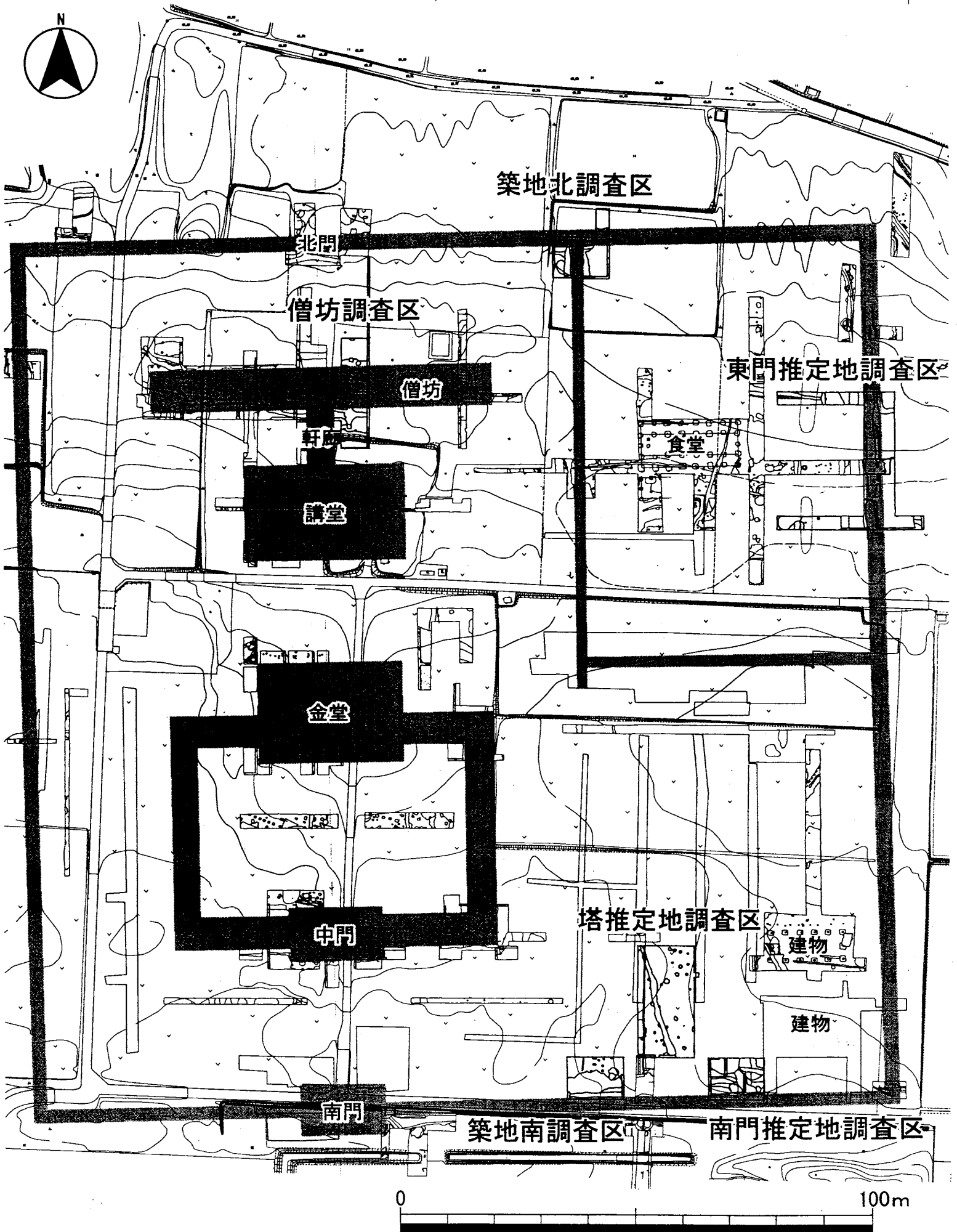
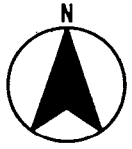
平成13年度には、東西19.5m×南北11.9mの中門基壇と、中門と金堂を結び金堂院を構成する東西68m×南北51m、幅7mの回廊を確認しました。

平成14年度には南北11.2m×東西17.6mの規模の南門基壇を確認したほか、<sup>がらんち</sup>伽藍地の東1/3が南北方向の築地塀によって区画され、その内部がさらに東西方向の築地塀によって区画されているのが確認されました。このことから、北東と南東の2つの<sup>いん</sup>院(区画)を形成しているのではないかと考えられるようになりました。<sup>ほったてばしら</sup>伽藍地の南東隅からは大型の<sup>ほったてばしら</sup>掘立柱建物が見つかりました。

昨年度には、南東隅の掘立柱建物の北側にさらにもう1棟の掘立柱建物が見つかり、北東院からは<sup>じまどう</sup>食堂と考えられる建物も見つかりました。<sup>こうどう</sup>講堂の北側からは南北9m(30尺)×東西72m(240尺)の規模と考えられる<sup>そうぼう</sup>僧坊も見つかりました。

## 2. 今年度の調査

昨年度の調査では、これまで未確認であった僧坊や食堂などの主要な建物が発見されました。しかし塔がいまだ未確認で、また、僧坊の残り具合が非常に悪かったため、今年度は、昨年度の調査結果の再確認と塔の確認をするために次の6地区に調査区を設定しました。



伊勢国分寺跡第30次発掘調査区位置図 (1/1,000)

調査は遺跡の保存のためなるべく遺構検出までにとどめ、堆積状況や上下の切り合い関係を確認しなければならない場合のみ、最小限のサブトレンチを入れて断面の確認をおこないました。

『僧坊調査区』……僧坊と軒廊こんろうの規模の再確認

『築地北調査区』『築地南調査区』……伽藍地の東1/3を区画する南北方向の築地塀と、北辺と南辺それぞれの築地塀との接点の確認

『東門推定地調査区』……北東の院の東側の門の確認と西よりに建てられていた食堂と築地塀の間の確認

『南東院南門推定地調査区』……南東院の南側の門の確認

『塔推定地調査区』……いまだ未確認である塔の確認

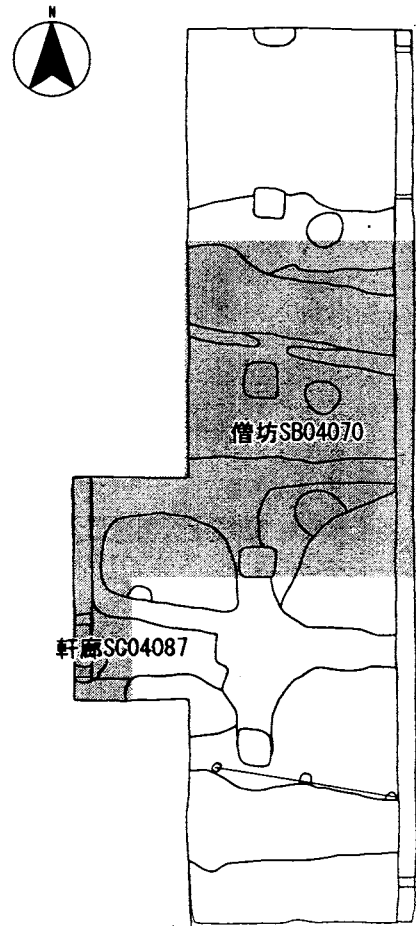
### 3. 調査の成果

#### 『僧坊調査区』

僧坊 (SB04070) 僧の宿舎となる長屋状の建物で、礎石もせき建ちの瓦ぶきの建物と思われます。盛土で作った台となる基壇は削られています。昨年度の調査では、わずかに残る外周溝などから南北9m (30尺) × 東西72m (240尺) の規模ではないかと推定されました。今回の調査では、調査区の北隅で北側の外周溝を確認しましたが、南側の外周溝は中世以降の土坑によって削られているため確認することはできませんでした。北側の外周溝が昨年度の調査結果と一致することから、南北幅が約9mではないかと考えられます。

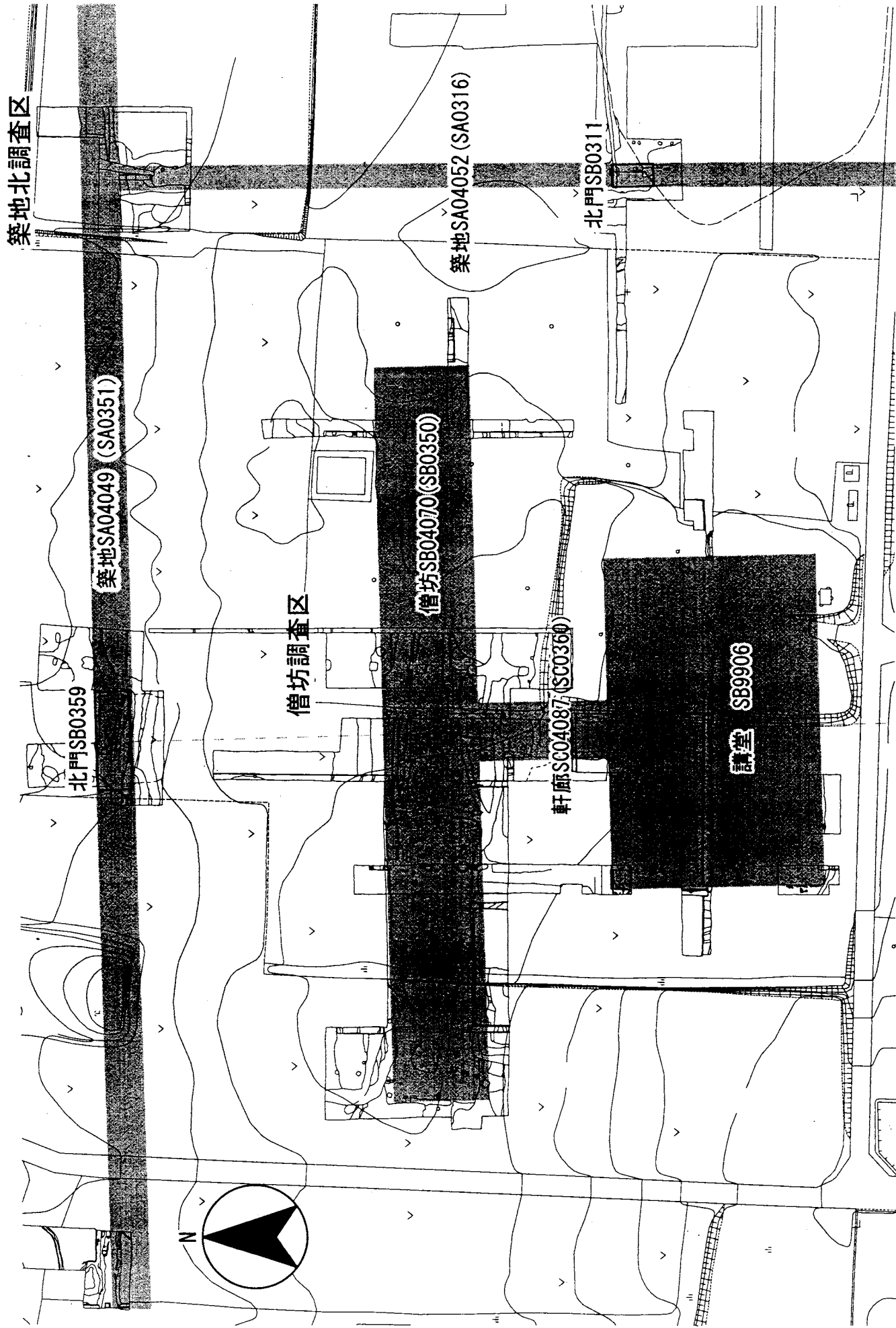
軒廊 (SC04087) 建物間を結ぶ廊下です。ここでは、僧が経法の講義をおこなう建物の講堂と僧坊を結ぶ廊下のことです。昨年度の調査では、講堂の主軸上に幅6m (20尺) の軒廊があったと推定されています。今回は東側を調査しました。僧坊同様に削られていて確認することはできませんでした。

その他の遺構 中世以降の溝・土坑を検出しました。



僧坊調査区遺構配置図 (1:200)





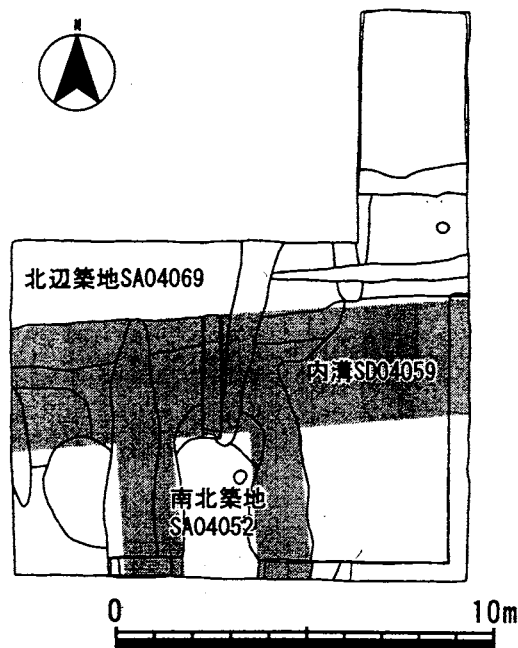
僧坊推定復元図 (1/500)

### 『築地北調査区』

北辺築地 (SA04069) (SA0351) 国分寺の区域を囲む北側の築地塀です。上部は削られてしまい、内側と外側の溝から基底部の幅が約 2.6 mであったと推定しました。

南北築地 (SA04052) 伽藍地の東 1/3 を区画する南北方向の築地塀です。北辺の築地塀と同様に上部は削られているため、東側と西側の溝から基底部の幅が約 2 mであったと推定しました。北辺の築地塀とは内側の溝をはさんでT字状になっています。

その他の遺構 溝と土坑を検出しました。



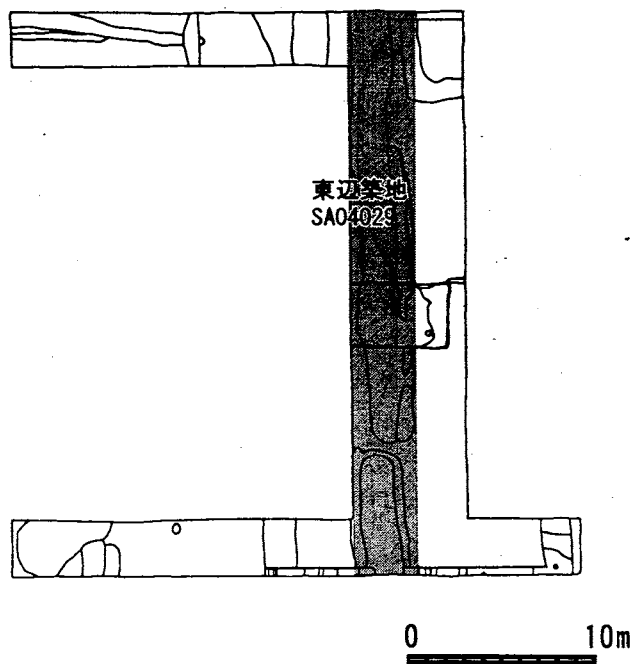
築地北調査区遺構配置図 (1:200)

### 『東門推定地調査区』

この調査区は、昨年度確認した食堂と考えられる建物の東側になります。この建物は南北方向は、ほぼ中心にあります。東西方向は西よりに建っています。そのため、東辺の築地塀と食堂との間に何かないかを確認するとともに、食堂を中心とした北東院の出入口となる東の門の確認の調査をしました。

東辺築地 (SA0429) 東辺の築地塀も他の築地塀と同様に上部が削られてしまっているため、内側と外側の溝から基底部の幅が約 2.5 mであったと推定しました。しかし、門などは確認できませんでした。これまでの調査で、北東の院では西側と南側で門を確認していますが、伽藍地の外とをつなぐ門は未確認です。

その他の遺構 溝・土坑・ピット (柱跡) を検出しました。



東門推定地調査区遺構配置図 (1:400)

## 『塔推定地調査区』

国分寺に関連するようなものは確認できませんでした。

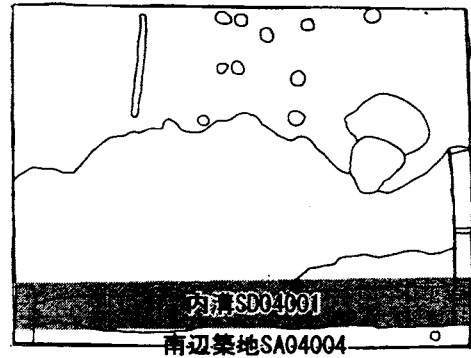
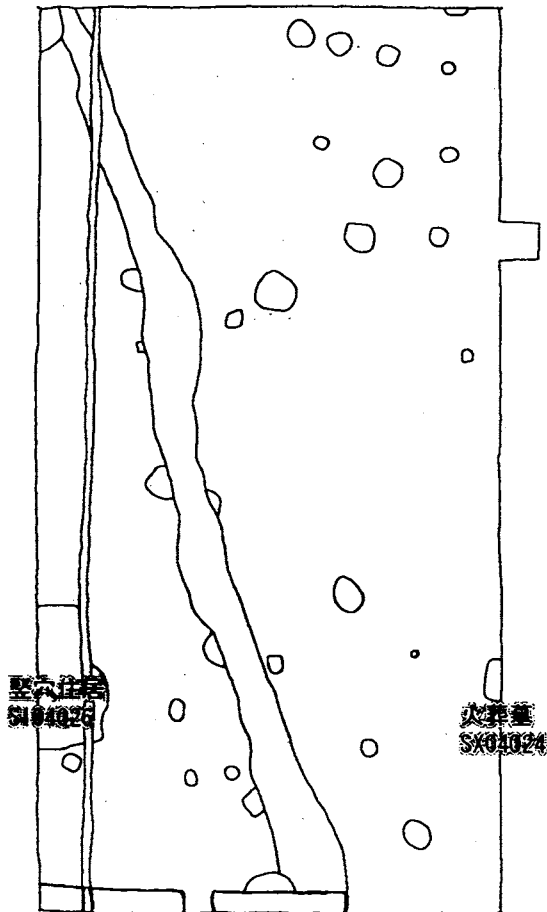
その他の遺構 竪穴住居1基、火葬墓1基、溝と大小のピットを検出した。ピットは建物として成立するものではありませんでした。

## 『築地南調査区』

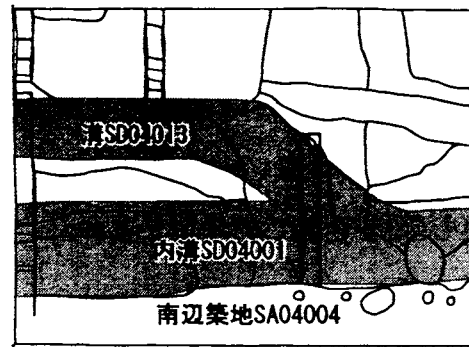
この調査区は、伽藍地の東1/3を区画する南北方向の築地塀と南辺の築地塀の接点になります。

南辺築地 (SA04004) 外側の溝が道路の下にあるため幅は確認できませんでした。

その他の遺構 中世の溝、土坑、ピットを検出しています。



築地南調査区遺構配置図 (1:200)



南門推定地調査区遺構配置図 (1:200)

塔推定地調査区遺構配置図 (1:200)



## 『南東院南門推定地調査区』

南辺築地 (SA04004) 外側の溝が道路の下にあるため幅は確認できませんでした。

溝 (SD04013) 幅約 1.5 m の溝で、築地の内側の溝 (SD04001) 上から北にまがっています。

溝が築地の内側の溝から出て、築地塀から離れて迂回していることから、迂回したところに門があったのではないかと予想されます。迂回している部分の上の瓦溜りからは、大ぶりの瓦と数点の軒瓦が出土しています。

その他の遺構 多数の溝、土坑、ピットを検出しています。

## 4. まとめ

今回の調査は、これまでの調査成果の裏付けとして、僧坊の規模と、南北方向の築地塀が北辺の築地塀まで存在したことが確認できました。

主要伽藍の僧坊 (SB04070) は、北側の外周溝を確認しました。昨年度の調査では、東端で南北と東の外周溝しか確認できませんでしたので、東西の規模は伽藍の中心軸で折り返して推定しています。そのため、僧坊が東西に2棟並ぶ可能性も考えられました。しかし、今回の調査で調査区の全体に渡って北側の外周溝を確認しましたので、僧坊の規模は南北 9 m (30 尺) × 東西 72 m (240 尺) の東西に長い建物であったのではないかと考えられます。

伽藍地内の区画については、南北方向の築地塀が北辺の築地塀まで存在していたことを確認しました。しかし、大型の掘建柱建物をともなう南側では南北方向の築地塀を確認することはできませんでした。南辺の築地塀では、門が存在した可能性があることから、もし、出入り口となる門があったとすると、何らかの院が形成されていた可能性もあります。今後、道路の下にあるであろうと思われる南辺の築地塀の外側の溝などを調査し、門の存在について検証していく必要があります。

当初の大きな目的であった塔については、今回の調査でも手がかりが得られませんでした。

国分寺には塔があり国分尼寺には塔がないことが文献や全国各地の発掘調査の結果などから通説となっています。伊勢国分寺の伽藍地を南北方向の築地塀で区画された西側の狭い範囲と考え、塔がないことから尼寺ではないかという意見もあります。しかし、これまでの調査では、積極的に尼寺とする証拠も確認できていないことから、来年度以降も引き続き塔の確認調査を続けていきたいと思えます。

